



おなご衆たちが守り続ける伝承

群馬県六合村・ねとふみの里保存会



「ねどふみの里」の売りものに「足湯」がある。十人ほどが足を入れれば、一杯になってしまいう小さなものだが、標高千メートルを超え、周囲を山に囲まれた集落のなかで、まったりとした時間を過ごすことができる。ここは温泉の宝庫で尻焼、花敷などの名を冠した温泉がある。近くの草津温泉が酸性なのに対し、アルカリ性中心の温泉。昔から「草津のあがり湯」として利用されているという。

もう一つの売りものは、スゲを使ったむしろ織りや草履づくりを体験できること。「子どもどころ、草津温泉の旅館に、この「こんこんぞうり」を持っていったことがあるよ。旅館では、泊り客の履き物として使っていたんだよ」と、草履を編みながらおなご衆が説明してくれる。こんこんぞうりは、スゲを色とりどりの布で覆い、それを編んで作る草履。「こんこん」の名の由来は、草履の形を整えるため、木づちで叩く、その音に由来する説と、こんこんと雪の降る日の夜なべ仕事として草履づくりをしていたからの二説がある。県外からも、作り方を教えて欲しいという問い合わせもあり、カラフルでありながら素朴な草履は人気を博している。

ねどふみの里は、群馬県六合村（くにむら）の村役場から、さらに車で二十分ほどといった山間の根広地区にある。



かつて農家では、ごくあたりまえにわらを使つて筵をつくり、そこから、座布団代わりしたり、モノを干すときに使つたり、糞、背負い袋、草履、紐など実に多様な日用品を作つていた。しかし、傾斜が急なこの地では、稲作がほとんど行なわれていなかった。そこで、わらのかわりにスゲを用いた。

毎年九月、自生するスゲを刈り取り、川の温泉の湯に浸し、柔らかくする。ねどふみの意は、川に浸し流されないように石で固定していたことから、「寝どふみ」といわれたことに由来するといふ。こんな昔ながらの伝承は、ほとんど影をひそめたが、この集落では、連綿と伝わっているといふ。

ねどふみの伝承を今に伝えよう。そして、この伝承を活用して、地域の振興をはかろうと考へた地区の人たちは保存会を結成した。平成十五年十月のことである。その中心を担ったのは六十、七十代のおなご衆。まず、取り組んだのが拠点の確保。築百年を超える民家を改修した。この家は、保存会のメンバーの住居ともなっているが、無料で提供を受けている。一階を展示や作業所にあて、二階はスゲの保管場所として活用している。さらに庭先にはミニ足湯も作られた。メンバーたちは、休日などに交替つづめ、訪れる人をお茶やコーヒーでもてなすと



もに、筵や草履づくりの実演を行ない、体験コースも用意している。

家の改修こそは、県の「地域資源活用ふるさとづくり支援事業」に資金を仰いだり、日々の運営は自前で行なっている。収入源となっているのは、草履などの売り上げに加え、足湯利用者には、百円の協力を仰ぎ、黒字を維持している。これからも山里の集落での小さな衆の頑張りに期待したい。

■ 連絡先 群馬県六合村入山

「ねとふみの里」保存会

TEL 〇二七九・九五・五三二四

http://www.vill.kuni.gunma.jp/
kankou/taikenshitsu/nedofumi.html

